

第75回長野県図書館大会兼第33回北信越学校図書館研究大会

(参加人数 34人)

分科会 NO5 (学校図書館)

<学校図書館運営の実際(情報センター機能)>

<図書館 ICT パワーアップ>

司会 氏名 坂下 満智子 (所属 飯田 OIDE 長姫高等学校)

記録 氏名 服部 伸也 (所属 千曲市立戸倉小学校)

9:30開始

1 発表の概要

(1) 発表者氏名 上小澤 久美子 (かみこざわ くみこ) (所属 塩尻市立広陵中学校)

「中学校におけるデジとしょ信州」の活用 一塩尻市立丘中学校での実践一

前任校での実践発表

デジとしょ信州と出会い、学校子どもたちに導入できたらという思いから本発表を行う。

利便性を生かし生徒の読書の可能性を広げることや紙の本と電子書籍どちらでも読書できる環境を整えることを目指している。

丘中学校では生徒全員の登録完了。全校体制でスムーズな導入を行った。

成果 読書をする生徒が増加 2023～2024で3から4倍の利用率となった。

紙、電子書籍の選択ができる。

課題 不便だと感じる児童が2倍に増えた。タブレットのルール破り

→困っている児童に個別指導を行う。正しいタブレットの使い方を指導。

デジとしょ信州の導入に際し生じた成果と課題をもとに今後の活用の仕方を探っている。

質問

塩尻至学館高校 畑上 友里 先生

Q デジとしょ信州導入に当たり市立図書館とのかかわりはあるか?

A 77市町村でお金を出して、県立がプラットフォームとなっている。

窓口は県立図書館となっている。県立に連絡をしたら、市町村に依頼してほしいと連絡があった。市町村から県にお願いする形となっている。

Q 全体に登録するときに苦労した点はあるか？

A アナログ・・・。学校で手続する前に生徒の登録番号、出席番号、塩尻市の番号を入れた名簿を作成する。名前とクラスを抜いた状態の物を市立図書館に依頼。それを担任にIDをわたし、生徒手帳に保管させている。GoogleIDが書かれたカードと同じ扱いしている。パスワードを変える作業が困難。

安曇野市立 穂高西中 西澤 智美 先生

Q 校内担当進めているがなかなか進まない。隙間時間にタブレットが触れない。もともと間口が広かったか、導入で間口が広がったか？

A コロナをきっかけにタブレット利用のメリットに目をつけ、職員間で一致していた。タブレットを文房具の一部として使おうという指導があった。教育委員会の担当も指導してくれた。学校を上げて活用としようとする体制ができている。朝もタイピングをしようと言っていたが、それをデジとしょにしようと声掛け。タブレットのルールを守れない子もいるが、使っていこうという学校の姿勢がある。

Q 担任の先生の指導があるので、司書から声をかけづらい部分がある。隙間時間に活用できればともどかしい部分がある。また、デジタルでの書籍の貸し借りは便利だと感じる。

A 校内にデジとしょの紹介をした時の話。知っている先生は校内に2名。まずは見せてみた。その後も様々な先生に見せてみた。教務主任にも声掛けし、簡単にできるならいいね。校長教頭情報担当にも声掛けし、教務会にかける。そのおかげか、導入に際し組織的に導入する流れができた。

Q 教務会にまでもっていくことが難しい。その前の段階まで行くが・・・。めげずにやっていく。

茅野市立 永明小 大西 恵美 先生

Q 生徒の登録は卒業、入学時の入れ替えはあるか？

A ある。市立図書館に連絡しおこなっていただく。

諏訪市立諏訪中 宮坂 千鶴 先生

Q 図書館自体の利用の状況はどんな変化があったか？それを踏まえて新たな企画をしているか？

A アンケートを比べての増加の数である。紙媒体の読書が減ったことについては、質問内容に「紙を読まなくなった」という項目があるが、その内容を提示している。学校図書館の利用は数のカウントしてないが変わらないように感じる。コロナの休校もあり、データの比較が難しい。すごく本を読む子はデジとしょもたくさん使う傾向がある。デジタルは古い図書が多いがそれも読む。

県立図書館からの補足

丘中が一括登録初めての学校であった。長くつかってもらう場合は公共図書館の ID を利用した方がよい。調べ学習に使えるようなパッケージも導入したい。子どもたちがどのような本を読みたいかを県に連絡してほしい。

10時5分終了

(2) 発表者氏名 吉田 綾 (よしだ あや) (長野西高等学校 学校司書)

「高等学校における図書館サービスへの ICT 導入状況と研修の試み」

現在の高校生をとりまく情報環境と情報行動をとらえ、学校図書館で提供したいサービスや、実際に取り組んできた取り組みを紹介した。全県アンケートをもとに見えてきた状況をとらえ、課題を設定し様々な活動に取り組んでいる。アンケートの結果は多岐に渡り収集が難しい様子がある。ICT 導入の統一的な活用に向け、まず有志 (TEAMS) で取り組み、連携を取りながらより良い ICT 活用を漸進させていきたいという発表内容であった。

質問

上田高校 大山 恵美 先生

Q 私立高校と公立高校で Google 機能を使ってチームスを使おうとすると困る。

A これから研究が必要。まずは有志で運営し今後に生かす。

須坂市立 東中 坪井 巧子 先生

Q 文化祭の時に作った動画がキャンバ使用。キャンバを教員が個人的に深める機会がない。高校ではキャンバをどのように使っているか? どのような活用の可能性があるか?

A 学校内でどんどん使っていこうとしている先生が広報した。その先生が自分のクラスでどんどん使い、そのクラスの生徒が司書に作ったポスターを見せたことをきっかけに便利さに気づいた。そこからチラシやプリントづくりに活用した。参考文献に活用の参考文献を載せたので利用してほしい。

県立図書館 職員

Q 高校でキノデンの活用はどうか?

A 生徒一人一人の活用は難しい。県立図書館への利用申請書が難しい。

Q 県立図書館の方にも課題がある。

10時40分終了

休憩

10時50分開始

(3) 発表者氏名 下牧 寛幸 (しもまき ひろゆき) (石川県 野々市市立布水中学校)
「個別最適な学びと共働的な学びにつながる学習情報指導」

情報活用の課題として、「情報の収集、整理・分析でつまづく児童が多い。」「情報の選択が難しい。」ということがある。「図書・WEBを正しく使う知識が乏しい。」ということも原因として考えられる。情報の活用の経験を積み重ねることで解消していくのではないかという仮説をもとに、多教科における実践事例の発表を行った。実践からは図書を活用してほしいところでもあったがWEBの利用が多かったこと、「情報を削る」作業の困難さ、引用、要約の違いがなんとなくしか分かっていないので具体説明したこと等を示し、個別最適な学びと、協働的な学びにつなげる情報学習の事例を紹介した。

質問

長野西高校 吉田 綾 先生

Q 新聞学習で素材となる新聞を人数分確保するにはどうするか？

A 3社分確保しているが、年明けくらいから確保していた

上越市立 黒田小 高波 英里 先生

Q 引用する際にコピペで安易に張り付けてしまうことがあるが、中学校ではどのような様子であるか？

A 出典を書くようにすることは事細かに指導していただいているが、なかなか難しい部分もある。

安曇野市立 穂高西中 西澤 智美 先生

Q 長野県ではデジとしょ信州が浸透しているかが気になる。石川県での探究場面でのデジタル図書の活用はあるか？

A 活用できるようになっているが、生徒個人で使えるようにはなっていない。デジタルを読書と認めるのかという議論はある。どうしても紙に触れてもらいたい、管理の問題、図書館に来てほしいなどの思いもあり、進んでいない。いずれは入るだろう。

茅野市立 永明小 大西 恵美 先生

Q 総合の授業は先生が行ったか？

A 新聞を活用したものは自分が行ったもの。別の物はほかの先生がやったこと。

Q ほかの先生の授業の司書教諭として関わることはあるか？

A ない。パイプ役のようになることはある。

11時20分終了 時間が余ったので意見交換を行う。12:00終了

【分科会記録】第 6 分科会

(参加人数 25 人)

分科会テーマ	学校図書館運営の実際 図書館機能の活性化
司会	氏名：田村 稔（所属：胎内市立築地小学校）
記録	氏名：近藤 梓（所属：御代田町立御代田中学校）

1 発表の概要

(1) 発表者氏名（所属）

荻原 好枝（御代田町立御代田北小学校）

鈴木 亜希子（御代田町立御代田北小学校）

(2) 発表者氏名（所属）

内山 さとみ（新潟市立葛塚小学校）

2 討議の概要

御代田町立御代田北小学校

○調べる学習コンクールの実践

・町図書館との連携

（先生方への研修・テーマ選びやまとめ方のアドバイスといった講座の開設・相互貸借）

・旬を意識した図書館のレイアウト。授業との連携（関連本の掲示）。

・図書館を通じた学びを積極的に掲示

→図書館だよりを月に1回発行、多読賞を表彰、読み聞かせなど。

・子どもたちによるアイデア

→「みよきた宝くじ」「このほんなんだパズル」

○課題

活字に向かう力が弱くなっている。→手書きを大事にしたい。

子どもの実態として、マンガなど視覚的にわかりやすいものにとびつきがちである。

新潟市立葛塚小学校

○学校ぐるみで取り組むために

・各学年の図書館担当 + 司書の7人で組織する「図書館部」を結成。

○具体的な取組

・指導内容を記した一覧表を作成。

・学年の渡り廊下に、教科書で学んだ関連本を展示。

・読書郵便。

・おはなし玉手箱（2回の読み聞かせボランティア）。

・詩人と本を紹介するコーナー（毎月）。

・豊栄図書館の出張授業にてポプラディアの使い方を指導。

・市教委の協力のもと、年間指導計画の作成。

「グループ討議のまとめ」より

～御代田町立御代田北小学校の発表を受けて～

- ① 子どもたちの学びを支えるこまやかな取り組み
- ② 探究学習への誘いとなっている「調べる学習コンクール」
- ③ 公共図書館と学校図書館の協力・連携

コンクールに取り組むことで、調べるための本の利用の仕方を身に着けることができる。（参加者の声）

～新潟市立葛塚小学校の発表を受けて～

- ① 図書館機能の見通しと見える化
- ② 図書館司書と先生方との連携・内容の共有化
- ③ 図書館の時間の確保

ロイロノートを活用しての活動がすばらしい。毎月の詩の掲示、すぐにやってみたい。（参加者の声）

読書活動を通して心の育成

子ども自身が
学びの担い手
となる仕組み

持続的な発展を
見えた取組

学びが
見える
図書館

児童主体の図書館づくり

子どもを中心とした
探究的な学び

調べる学習による
探究力の育成

年間活動計画に図書館活用明示

学年、情報部との連携

持続的な地域連携・中学校区連携

多様で創造的な児童参加活動

【分科会記録】第 7 分科会

（参加人数 26 人）

分科会テーマ	学校図書館運営の実際～学びを支える図書館①～
司会	氏名 高橋 路子（新潟県胎内市立きのと小学校）
記録	氏名 宮尾 菜々美（安曇野市立穂高南小学校）

1 発表の概要

(1) 発表者氏名 平澤 洋子先生
(茅野市立金沢小学校)

○実践① 学校図書館を支える環境づくり
教室棟や昇降口から離れた図書館のため、環境を整備した。天井から吊した標語や壁面掲示、季節や学年に合わせた本の紹介等、子どもたちが足を運びやすい図書館を目指して取り組んでいる。

○実践② 読書センターとしての図書館
長年続く「朝の読書活動」は、児童、教師全員が 10 分間読書に没頭している。また、地域ボランティアによる定期的な読み聞かせや、「家庭読書の日」を実施している。図書委員会による、おすすめ本の寸劇や、委員が読み聞かせる本に登場する料理が提供される「おはなし給食」などで読書推進を図っている。

○実践③ 情報・学習センター
分類の仕組みやポプラディア、年鑑などの資料を学年に応じて指導し、「問い合わせて図書館へ行く」習慣を子どもたちに定着させた。教科横断的な学びを取り入れ、図書館活用授業コンクールで優秀賞を受賞するなどの成果を上げている。

○成果と課題

- ・夏休みの課題として「調べる学習」に取り組む児童が増え、1 年生でも挑戦する子が増えってきた。
- ・「調べる学習コンクール」へ出展する作品

に手直しが必要な場合が多く、手直しが必要ない作品を作り上げられるよう日々指導を続けている。

(2) 発表者氏名 正來 洋校長先生
(石川県白山市立鳥越小学校)

○実践① 学校図書館システムの概要
司書部会・学校図書館部会の 2 つの組織があり、専門研修、実践事例の検討共有が行われている。「学校図書館支援センター」では、小中学校へ本を週 1 回配達したり、センター係長が配置され、授業への助言・指導をしたりすることができるようになった。

○実践② 学習情報指導の状況

学校司書が進めてきた実践データ、学校司書の業務システムマニュアルや指導場面が教材パッケージとして共有され、異動や新規採用に際して、指導の継続性を担保している。市立図書館と連携した「調べ学習チャレンジセミナー」などを実施し、毎年 2,000 点超の応募がある「調べ学習コンクール」を推進している。

○実践③ 白山市学校図書館の課題
学校図書館を授業へつなげるべく講師を招き研修会を重ねている。特に東京学芸大学附属世田谷中学校司書・村上恭子氏の「校内で（司書・司書教諭だけでなく授業者という）『第 3 の仲間』を作る意義」という指摘が、受講者の心に響いた。

○成果と課題

- ・高い運営レベルと学習情報指導の定着、

「調べ学習」も各校で継続的に取り組んでいる。

- ・司書や司書教諭の専門性を高めることや授業者とのさらなる連携のため、日常業務と研究開発業務のバランスを取る。

（3）発表者氏名 廣中優奈先生

北村加代子先生（千曲市立更埴西中学校）

○実践① 学校司書による本の紹介

千曲市の図書館司書で行っている「本の紹介」は、基本的に一人仕事の司書にとって新しい本との出会い、図書館づくりや読み聞かせにも役立っている。

○実践② 「工夫して魅力を伝えよう」

学校司書部会での「本の紹介」を中学1年生「工夫して魅力を伝えよう」の単元に活かし、「本の帯づくり」に取り組んだ。生徒は好きな本を選び、実際の帯を分析して、あらすじやキャッチコピーなどの必須構成要素を理解した。その後、本のタイトルやイラストを活かすように表現の幅を広げて帯を作成し、クラス内で共有した。

○ワークショップ おすすめ本紹介

おすすめの本を色画用紙にポップのようにな書き、グループの中で発表し合うワークショップを行った。先生方の紹介する本はとても興味深く、気になっていた本や全く知らなかった本もあった。「読んでみたい」「このあとポチッとします」等、好意的な反応があり、新たな本との出会いがたくさんあったワークショップとなった。

○成果と課題

- ・生徒が帯づくりを通して、文章から必要な情報を選択・要約する力につくことができた。
- ・魅力をどう伝えたらいいか悩む生徒が多かったため、図書館や書店などでプロの表

現に触れる機会を増やしたい。

（4）発表者氏名 川本 慎一先生

（新潟県新潟市立小須戸中学校）

○実践① 朝読書の徹底

職員全員の周知徹底のもと、朝読書の時間を10分間確保し、学級文庫を毎月交換して誰でも様々な種類の本を読める環境を整備した。

○実践② 季節や行事に合わせた展示

司書が中心となり、学校行事や季節に合わせた展示・掲示を図書館内外で行い、生徒の興味を引いた。

○実践③ 図書委員会の活動の充実

しおり・ブックカバーのプレゼント、学級文庫の管理、ワゴンで廊下に出向く移動図書、読書旬間での「本の福袋」「近隣3校の人気本ランキング」、他委員会とのコラボ展示等、さまざまな活動を行った。

○実践④ 読書バリアフリー化

読みやすさに配慮した本を集めた「りんごの棚」を設置し、またリーディングトラッカー、カラーバーレーベ等も設置した。

○成果と課題

- ・普段利用しない生徒に興味を持つもらい、貸出冊数が増加傾向にある。
- ・依然として未利用者が多いため、今後は未利用者への取り組みや、いろんなジャンルの本に触れる機会を増やす支援に重点を置く。

2 討議の概要

それぞれの発表が充実しており、討議をする時間はとれなかったが、発表者、参加者の先生方のおかげで、実践発表、ワークショップ、質疑等内容の濃い、学びの多い時間をすごすことができた。

【分科会記録】第 8 分科会

（参加人数 27 人）

分科会テーマ	学校図書館運営の実際（学習センター機能）　学びを支える図書館②
司会	氏名（所属）勝山 宏子（新潟県立三条高等学校）
記録	氏名（所属）平沢 恵美子（長野県小諸高等学校）

1 発表の概要

(1) 発表者氏名（所属）

田中 和彦（長野県上田染谷丘高等学校）

近年増えてきた推薦入試を受験する生徒や指導にあたる教員に対して、図書館がどのような支援を行ったか発表された。

「総合型・学校推薦型選抜入試」に対する職員体制を組み、司書も司書資格や司書教諭資格の取得を目指す生徒のサポートをすることもある。

支援の一つとして、過去問の資料原典や大学の先生の著作物提供のために「学術機関リポジトリデータベース」の活用をしている。また、ビブリオバトル方式の試験がある生徒にはその方法や本の選び方などのアドバイスをした。支援にあたっては、入試要項・過去問の確認、関連資料の購入を心掛けているが、集中する時期には多くの生徒への対応が必要になる。

(2) 発表者氏名（所属）

米岡 幹夫（石川県 小松大谷高等学校）

元職員から、多数（約 1700 冊）の図書寄贈の申し出があったが、古いものが多く生徒が使えそうな本はなかった。そのまま廃棄という訳にもいかず、比較的きれいな全集のみ残し、登録、貸出の手続きは行わないことにした。今回の事で、他校では寄贈本の申入れにどのように対応しているのか聞いてみたが、ほとんどの学校は処分に困る本を持ち込まれたりするので、寄贈は受け付けていないと言うことだった。管理職や学校の状況にもよるが、ルールを考えておく必要を感じた。

(3) 発表者氏名（所属）

二瓶 紗和子（新潟県立中条高等学校）

校長が地域の絵本読み聞かせボランティアを行った事をきっかけに、生徒が近隣の中学校を訪問し、絵本の読み聞かせを行う活動をしている。

小中学校 6 校、朝の学級活動の 10 分間。国語表現・保育選択者・図書委員などの有志を募り令和 6 年度は延べ 60 人が参加。読み聞かせ経験豊富な司書が、読み聞かせ実習を行っており絵本も充実している。生徒は、司書のアドバイスも参考に担当学年に合っ

た絵本を選び、本番まで 10 回は読んで話すスピードや声の大きさ、ページのめくり方を練習した。

子どもたちに好評で生徒も自信がつき自己肯定感の向上につながった。

ただ、実施には練習時間の確保や学校行事との兼ね合い、職員の引率負担などの見直しが必要であるが、生徒が地域とつながり成長していく姿を支えていきたい。

(4) 発表者氏名（所属）

小日向 智子（新潟県立三条高等学校）

グローバルとローカルを融合させたグローカル探究（G 探）に重点を置いており、1 年生の G 探は本を読むことをスタート地点とした。その方法として点検読書を実施している。

10 面サイコロでテーマを選び、本を探し点検読書を行った。テーマに関連する分類番号を意識したり奥付の仕組みを理解できた。また主体的に関わる事や要点をつかむコツ、プレゼンテーションの練習にもなり、本から入る大切さを感じてくれたようだ。

2 討議の概要

(1) 「学術機関リポジトリ」などの利用について参考になった。

(2) 何校かの寄贈本受入状況が話された。学校毎の事情もあるので、それぞれの対応が必要だと考えられる。

(3) 読み聞かせの指導方法で司書と司書教諭にくい違いはなかったかとの質問に対し、お互い自由に指導したとの回答。良い実践ではあるのだが、引率にかかる労力が大きいとの報告があった。

(4) 点検読書を探究に入れた理由は？という質問に、文部科学省の WWL（World Wide Learning）コンソーシアム構築事業カリキュラム開発拠点校の担当教諭からと回答。

図書館に生徒が来るようにするには、教員が図書館を利用するよう声掛けをするのが大事。という発言があった。